名　広　遺　跡

―A　調　査　区―

―県営圃場整備事業（船佐地区）に伴う発掘調査―

1987

広島県立埋蔵文化財センター

例　　言

1. 本書は，県営圃場整備事業（船佐地区）に伴い高田郡高宮町勝後において実施した名広遺跡（A調査区）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は，広島県教育委員会が得た昭和61年度の国庫補助金をもって広島県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は，唐口勉三・片山和哉が，出土遺物の整理・実測等は唐口・片山が担当し，遺物の写真は，伊藤実が撮影した。
4. 掘立柱建物跡については，奈良国立文化財研究所建造物研究室宮本長二郎氏に御教示をうけた。
5. 本書の執筆・編集は唐口が担当した。
6. 本書に掲載した第１図は，建設省国土地理院発行の50,000分の１の地形図（八重）を使用した。
7. 本書で使用した遺構表示記号は，ＳＢ：住居跡・住居跡状遺構・掘立柱建物跡，ＳＫ：土坑，ＳＤ：溝状遺構，ＳＸ：不明遺構とした。
8. 土器の断面は，弥生土器・土師器・土師質土器は白ヌキ，須恵器は黒ヌリで区別した。
9. 本書で使用した方位は，すべて磁北である。
10. 本遺跡の理解を深めるために，本書と同時に刊行される『名広遺跡』―Ｂ調査区―財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（1987年）を併読されたい。

目　　次

Ⅰ　はじめに……（1）
Ⅱ　位置と環境……（2）
Ⅲ　調査の概要……（5）
Ⅳ　遺構と遺物……（6）
Ⅴ　まとめ……（25）

図 版 目 次

図版1　a　遺跡遠景　（東から）
　　b　調査区全景　（西から）
　　c　調査区中央部完掘状況（東南から）
図版2　a　ＳＢ１完掘状況　（南から）
　　b　ＳＢ２遺物出土状況　（東から）
　　c　ＳＫ２完掘状況　（西から）
図版3　出土遺物（１）
図版4　出土遺物（２）
図版5　出土遺物（３）

挿 図 目 次

第1図　周辺主要遺跡分布図（１：50,000）……（３）
第2図　周辺地形図（１：2,000）……（４）
第3図　名広遺跡試掘調査による出土遺物実測図（１：３）……（５）
第4図　遺構配置図（１：200）……（５）
第5図　ＳＢ１実測図（１：60）……（６）
第6図　ＳＢ１出土遺物実測図（１：３）……（７）
第7図　ＳＢ２・ＳＫ１・ＳＸ１実測図（１：60）……（８）
第8図　ＳＢ２出土遺物実測図（１）（１：３）……（13）
第9図　ＳＢ２出土遺物実測図（２）（１：３）……（14）
第10図　ＳＢ２出土遺物実測図（３）（１：３）……（15）
第11図　ＳＢ２出土遺物実測図（４）（１：３）……（16）
第12図　ＳＢ２出土遺物実測図（５）（１：３）……（17）
第13図　ＳＢ３実測図（１：60）……（18）
第14図　ＳＢ４実測図（１：60）……（19）
第15図　ＳＢ５実測図（１：60）……（19）
第16図　ＳＢ６実測図（１：60）……（20）
第17図　ＳＫ２～４実測図（１：60）……（21）
第18図　ＳＢ４・ＳＫ２・ＳＤ２出土遺物実測図（１：３）……（22）
　　（72―ＳＢ４，73―ＳＫ２，74―ＳＤ２）
第19図　ＳＸ２実測図（１：60）……（22）
第20図　表土・包含層出土遺物実測図（１：３）……（23）
　　（75～78―表土，79～81―包含層）

Ⅰ はじめに

この発掘調査は，広島県高田郡高宮町房後における県営圃場整備事業（船佐地区）にかかるものである。

昭和57年６月，高宮町から広島県教育委員会（以下「県教委」という）へ県営圃場整備事業船佐地区予定地内の埋蔵文化財の有無ならびに取扱いについての協議があった。これをうけて，県教委では予定地内の分布・試掘調査を実施し，名広遺跡を確認した。この取扱いについて，県教委では，事業主体者である広島県可部農林事務所高田地方耕地事業所（以下「高田耕地事業所」という）と協議を重ねたが，この予定地内の現状保存は困難であるとの結論に達したため，事前の発掘調査を行い記録保存を図ることとなり，昭和60年10月，高田耕地事業所から県教委に名広遺跡の発掘調査について依頼があった。

発掘調査は，文化庁と農林省との協議に基づき文化庁から各都道府県教育委員会へ通知された「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について」（昭和50年10月20日庁保記第211号）により 農家負担分に相当する部分については，広島県立埋蔵文化財センター（以下「県立センター」という）が，農政部負担分に相当する部分については，財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「財団センター」という）が調査することとなり，県立センターはＡ調査区を，財団センターはＢ調査区をそれぞれ分担して調査した。Ａ調査区の調査は，昭和61年４月７日から５月９日までの延べ18日間行った。調査面積は約250㎡，調査経費は1,200千円（うち国庫補助金600千円）である。

なお，調査にあたっては，高宮町教育委員会，財団センター，高田耕地事業所，高田郡高宮町船佐土地改良区ならびに地権者の吉貞玖一氏から多大の協力をうけた。また，整理にあたっては，向田裕始（東広島市教育委員会），藤田広幸・加藤和枝・船井向洋（財団センター）の各氏の御教示をうけた。さらに発掘作業は，地元高宮町房後・佐々部地区の方々の御尽力をいただいた。記して深甚の謝意を表する次第である。

Ⅱ 位置と環境

名広遺跡の所在する高田郡高宮町は，県北中央部に位置し，中国山地の脊梁部にあたる。平均標高は，約240mである。地形は，南半分が比較的なだらかであるのに対し，北半分は峻険である。その中央部を横切って江の川の支流生田川(いけだ)が蛇行しながら東流しており，その流域に狭長な沖積地を形成している。名広遺跡は，生田川と房後川の合流地点の南側に位置し，北向きにのびる丘陵の北裾の緩斜面に立地する。標高は，228～231mである。町内の地質は，大半が花崗岩・花崗斑岩・高田流紋岩（石英斑岩）から構成され，原田・房後地区一帯は高田流紋岩から成る。

次に，周辺の遺跡を概観してみたい。旧石器時代の遺構・遺物は，現在のところ町内では確認されていない。縄文時代の遺跡としては，後期の集落跡とみられる杉の原遺跡がある。弥生時代前期の遺跡は確認されていないが，中期の明見田遺跡（2）・新迫南遺跡（6）・白鳥遺跡（7）・寸志名遺跡（5）が，後期の向原遺跡（3）・仁王丸遺跡（4）・中の郷遺跡・杉の原遺跡が確認されている。これらのほとんどは，微高地ないし丘陵上に立地しており，谷水田経営を基盤とした集落が散在していたと思われる。なお，本遺跡B調査区では後期の集落跡が検出されている。

古墳時代の遺跡としては，町内で200基有余の古墳が確認されており，前方後円墳の白鳥古墳（8）・方墳とみられる新迫南第2号古墳（9）を除くほとんどが円墳である。前期古墳は，竪穴式石室，箱式石棺，石蓋土坑，土坑などを内部主体とするものが多く，房後・佐々部周辺に集中する傾向を示す。これに対し，後半期の古墳は，横穴式石室をもち各地の小河川沿いに数基単位で点在する状況がうかがえ，数量的に増大してくる。なお，本遺跡周辺では，鞍掛古墳群（10）・下房後古墳群（11）が確認されており，下房後第2号古墳からは須恵器の鳥形瓶が出土している。

古墳時代の集落として前半期のものは，寸志名遺跡で竪穴式住居跡15軒，本遺跡B調査区で3軒ほど検出されている。後半期のものは，未だ確認されておらず，終末期におけるものも不明確で，本遺跡B調査区で掘立柱建物跡群を検出している程度である。なお，祭祀遺跡として後谷遺跡（12）があり，6世紀後半頃の須恵器，小型手捏土器，滑石製模造品（剣形品）などが出土している。須恵器の窯跡としては，6世紀後半頃の行田窯跡（13），7世紀中頃～後半の明蓮窯跡（14）・矢賀迫窯跡（15），さらに美土里町久保土居池窯跡などから成る高宮古窯址群があり，6世紀後半から奈良時代にわたって高田郡あるいは安芸国北部の須恵器・瓦の生産・供給の拠点となっている。

第1図　周辺主要遺跡分布図（1：50,000）

1. 名広遺跡（弥生～中世）
2. 明見田遺跡（弥生）
3. 向原遺跡（弥生）
4. 仁王丸遺跡（弥生）
5. 寸志名遺跡（弥生～古墳）
6. 新迫南遺跡（弥生）
7. 白鳥遺跡（弥生～古墳）
8. 白鳥古墳
9. 新迫南古墳群
10. 鞍掛古墳群
11. 下房後古墳群
12. 後谷遺跡（古墳）
13. 行田窯跡
14. 明蓮窯跡
15. 矢賀迫窯跡
16. 面山城跡
17. 牛首城跡
18. 猪掛城跡
19. 高橋城跡

凡例
⊙：古　墳
◯：古墳群
■：窯　跡
▲：城　跡
●：集落跡・その他

奈良時代以降における高宮町は，高宮郡訓覓（くるべ）郷と高田郡舟木郷にまたがり，本遺跡の所在する房後地区は後者に属すると考えられている。中世に入ると，佐々部地区では佐々部氏の面山城（16）・牛首城（17），原田地区では高橋氏の猪掛城（18）・高橋城（19）など各地で多くの山城が築かれている。一方，同時期の集落跡はほとんど調査されておらず，本遺跡で中世後半頃の集落跡が確認された程度である。しかし，町内には陰陽をつなぐ旧往還道が通っていることから，それに沿って集落が点在していた可能性が高い。

参 考 文 献

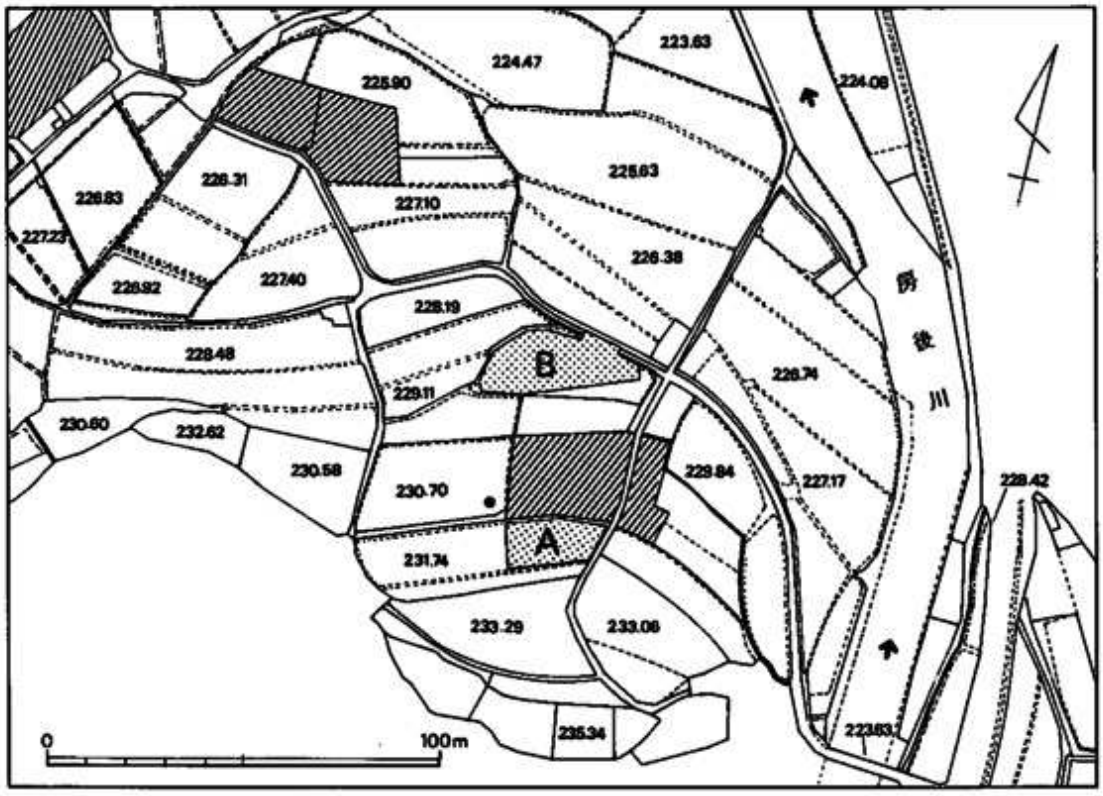
高宮町史編纂委員会『高宮町史』　昭和51（1976）年。

高田郡史編纂委員会『高田郡史』上巻　昭和47（1972）年。

広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（2）　昭和54（1979）年。

向田裕始「高田郡高宮町後谷遺跡出土の祭祀遺物」『芸備』第2集　昭和49（1974）年。

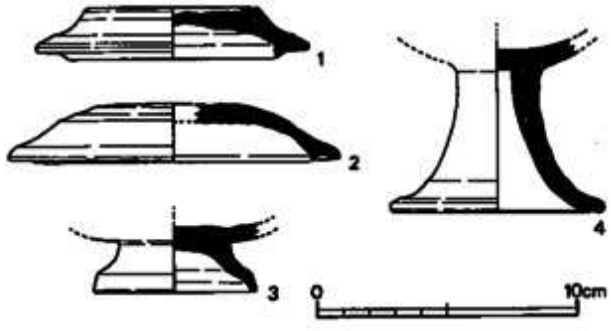
向田裕始「高宮町矢賀迫窯跡の調査」『広島県文化財ニュース』第72号　昭和52（1977）年。



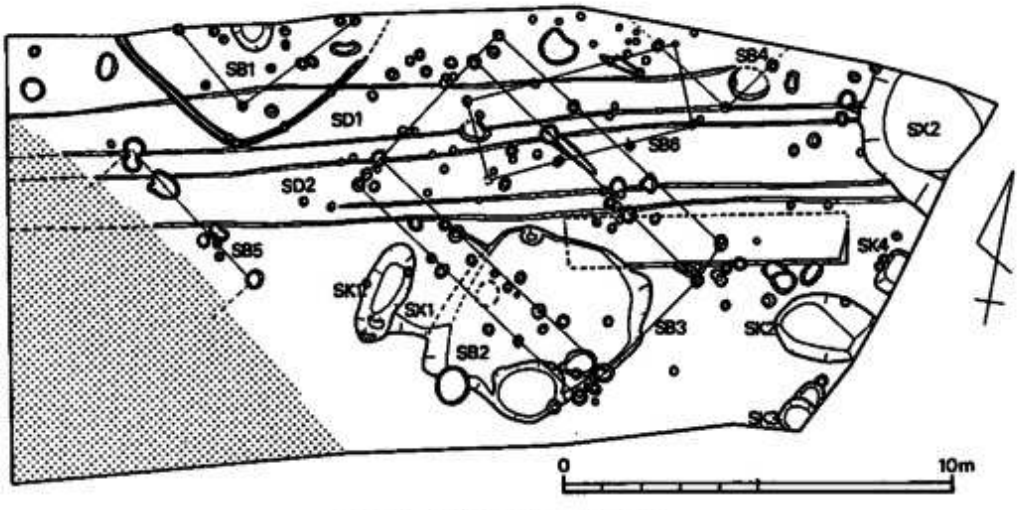
第2図　周辺地形図（1：2,000）
（7ミ目：調査区，斜線部：宅地，黒丸：試掘調査地点）

Ⅲ 調査の概要

今回調査のA調査区は，吉貞玖一氏宅南隣の水田（230—1番地）に設定した。名広遺跡内の南端にあたり，標高約231mと最高所に位置する。東側の直近を北流する房後川との比高差は約7mである。調査面積は，約250㎡である。土層の堆積状況は，上層から耕作土・床土(暗茶褐色土)・暗褐色土・地山（黄褐色土）となる。調査は，地山面で遺構を検出して行った。遺構は，古墳時代前期の住居跡1軒，古墳時代終末期の住居跡状遺構1軒，中世と推定される掘立柱建物跡3棟・土坑1基，近世頃の溝状遺構2条，時期不明の掘立柱建物跡1棟・土坑3基などがある。また，調査区西南部には黒フク土が厚く堆積しており，南東～北西方向に小さな谷が貫入していることを確認した。黒フク土上層から6世紀後半の遺物が出土している。なお，A調査区北西隣の水田の試掘調査では，東西方向にのびると推定される幅約2m，断面がV字状の溝状遺構が検出され，埋土から7世紀中頃～後半と考えられる須恵器が出土している（第3図)。これは，同時期のA調査区の住居跡状遺構・B調査区の建物群との関係が示唆される。



第3図　名広遺跡試掘調査による出土遺物実測図（1：3）



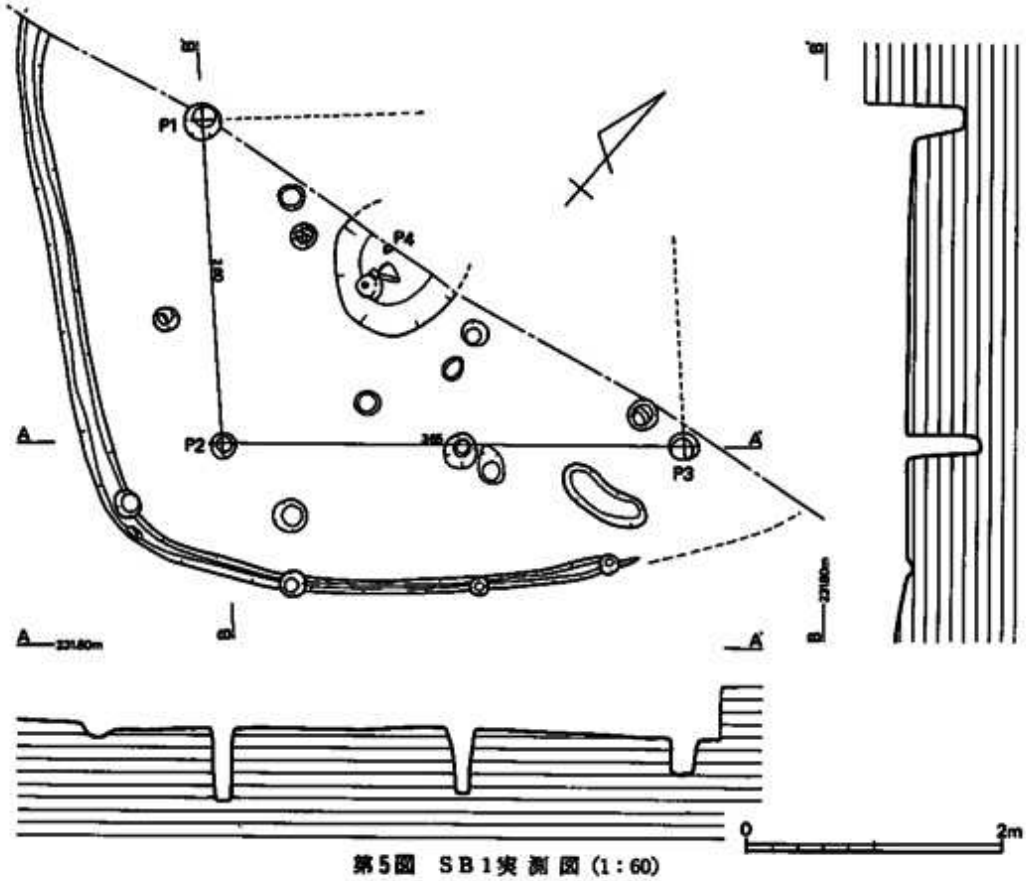
第4図　遺構配置図（1：200）
（アミ目：黒フク土堆積部）

Ⅳ 遺構と遺物

(1) 住居跡・住居跡状遺構

ＳＢ１（第５図，図版２ａ）

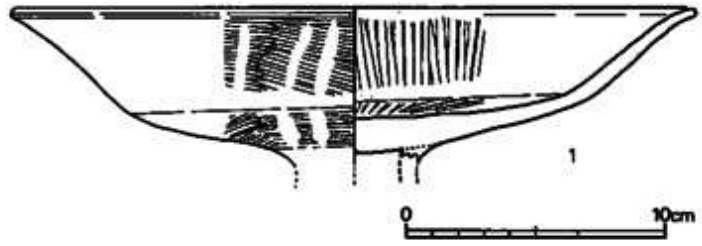
調査区北西部端で検出し，北半部は調査区外に拡がっている。壁溝や主柱穴のあり方から約６ｍ×５ｍの隅丸方形の竪穴式住居跡と推定される。上部は，既に削平されており，側壁や埋土の状況は不明である。壁溝は現状で幅0.10～0.23ｍ，深さ0.03～0.09ｍである。ピットは19個検出したが，大半が後世のものであり，ＳＢ１の主柱穴はＰ１～３と考えられる。Ｐ１は直径0.28ｍ・深さ0.39ｍ，Ｐ２は直径0.20ｍ・深さ0.57ｍ，Ｐ３は直径0.23ｍ・深さ0.27ｍで，柱間寸法は，Ｐ１～Ｐ２が2.60ｍ，Ｐ２～Ｐ３が3.65ｍである。ほぼ中央部のＰ４は，直径1.05ｍの円形状のピットである。深さは0.26ｍで，壁はゆるやかに立ち上る。埋土は，暗褐色土で主柱穴や壁溝と同質同色であり，ＳＢ１に伴うものと考えられる。Ｐ４で土師器の高杯杯部を伏せた状態で検出した。時期は布留式併行期と考えられ，ＳＢ１がこの時期に廃絶したものと思われる。



第５図　ＳＢ１実測図（1：60）

出土遺物（第６図，図版４）

土師器（１）は高杯の杯部で，脚部は欠失する。底面は平坦で体部にかけてわずかに稜をなして内湾して立ち上り，口縁部付近で外反する。口縁端部は丸みがある。底部裏面中央には直径４㎜の小孔がある。調整は内面が放射状の丁寧なヘラミガキ，外面がヨコ方向のハケ目の後粗いナデを施す。胎土は粗砂を若干含み，焼成はややあまく，色調は明黄褐色～暗褐色である。部分的に煤が付着している。口径は26.4㎝である。



第６図　ＳＢ１出土遺物実測図（1：3）

ＳＢ２（第７図，図版１ｃ・２ｂ）

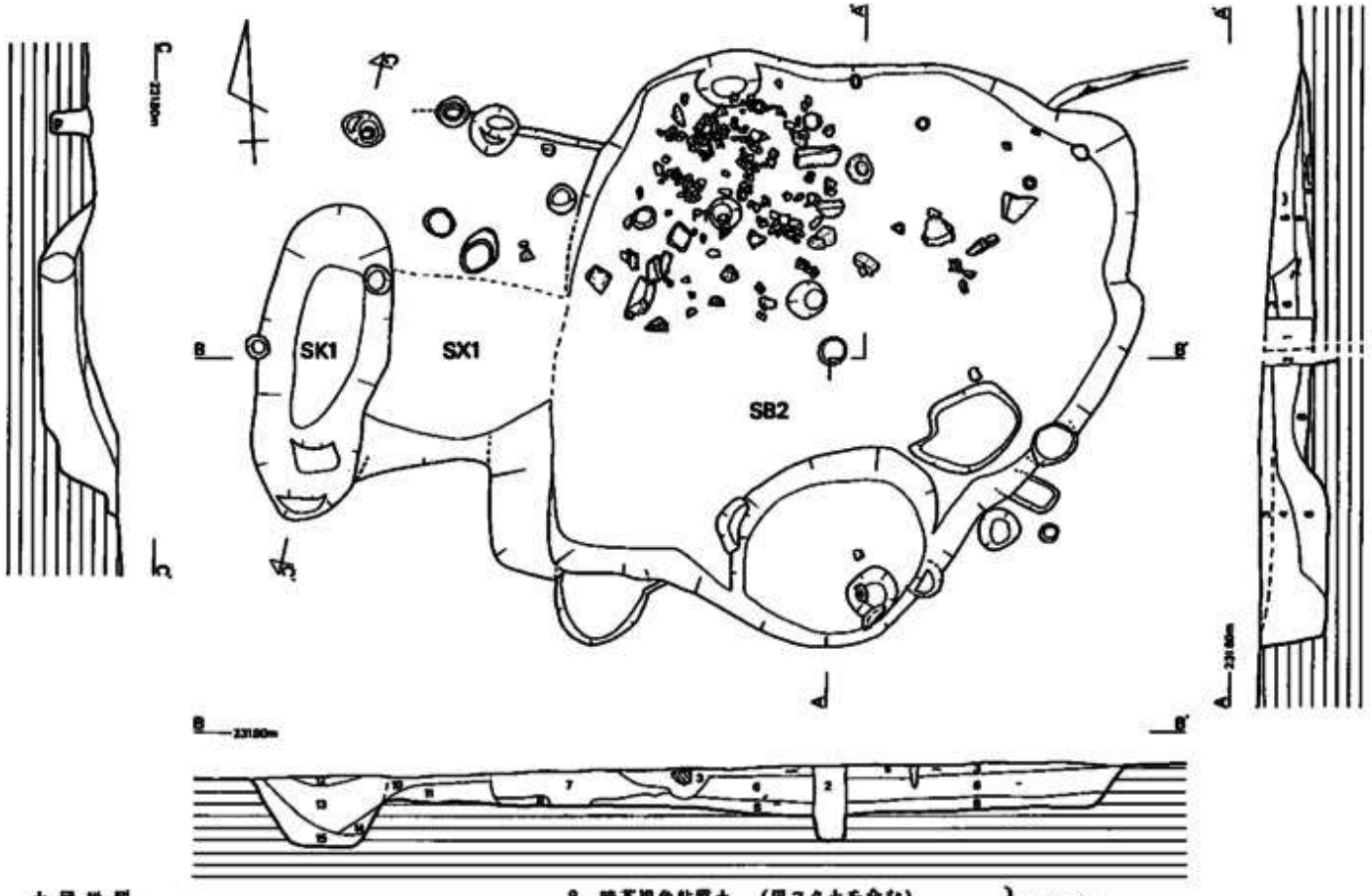
調査区中央部で検出した不整形の住居跡状遺構である。南北最大幅4.85m，東西最大幅4.70mで，現状の壁高は南壁際で0.40mである。側壁は南辺で垂直に，東辺・西辺で傾斜をもって立ち上る。床面はほぼ平坦で若干北側に傾斜している。床面のピットの大半は埋土上面から掘り込まれた後世のもので，ＳＢ２に伴うものはＰ１のみである。Ｐ１は直径0.26m・深さ0.11mである。また，南壁際の床面で楕円形状の浅い落ち込みを確認した。これは長径1.88m・短径1.50m・深さ0.05～0.17mである。土層観察から，第８層上面から掘り込まれている。以上の形状からはＳＢ２の性格・機能は判然としない。

埋土は，上・中・下層に大きく分けられる。上層（第３～５層）は暗灰黒色系土で黒ブク土に類似し，茶褐色土が混じるなど自然堆積土と思われる。中層（第６層）は茶褐色粘質土で，上部は堅くしまり，下部は黒褐色土が若干混じる。こうした状況から自然堆積というより人為的に短期間に埋められたものと考えられる。下層（第８・９層）のうち第８層も上部が第６層と同様に汚れがなく堅くしまった土で人為的な埋土と思われる。遺物はいずれの層位からも多く出土した。特に下層で人頭大～拳大の角礫に伴い大量の土器が出土しており，一括投棄されたものと考えられる。また，中層では下層出土の土器とともに新しい様相をもつ土器が出土している。他に，砥石・鉄滓などが出土している。これらの遺物から，ＳＢ２は７世紀中頃から後半にかけて埋められたものと考えられる。

出土遺物（第８～12図，図版３～５）

須恵器は杯蓋・杯身・高杯・盤・甕・甑・短頸壺・長頸壺・平瓶がある。

杯蓋（第８図２～14）はいずれも口縁部内側にかえりをもつものであるが，つまみの有無によって杯蓋Ⅰ・Ⅱに分けられる。



土層説明

1. 黒褐色粘質土
2. 暗褐色粘質土
3. 暗灰黒色粘質土　（黒フク土に近い）
4. 暗灰黒色粘質土　（赤褐色粘質土を含む）
5. 暗灰黒色粘質土　（茶褐色粘質土を含む）
} SB2上層
6. 茶褐色粘質土　（黒フク土を含む）— SB2中層
7. 黒フク土
8. 暗茶褐色粘質土　（黒フク土を含む）
9. 灰黒色粘質土　（黒フク土に近い）
} SB2下層
10. 黒フク土
11. 淡黄褐色粘質土　（地山＋茶褐色土混合）
} SX1埋土
12. 暗茶褐色粘質土
13. 黒フク土　（茶褐色土を含む）
14. 黒フク土　（茶褐色粘質土ブロックを含む）
15. 黒フク土　（黄褐色粘質土ブロックを含む）
} SK1埋土

0　2m

第7図　SB2・SK1・SX1実測図（1：60）

杯蓋Ⅰ（2～11）　つまみをもたないものである。形状は，天井部が平坦なものと丸みのあるものがあり，また口縁部内側のかえりが口縁端部より下方に突出するものと突出しないものとがある。調整はいずれも天井部は回転ヘラ切りでその痕跡を明瞭に残すものが多い。内側は回転ナデ後仕上げナデ，その他は回転ナデである。焼成は10を除いて概ね良好で，色調は灰色である。9の外面には「×」の字形のヘラ記号がある。口径は9.6～11.4㎝，器高は1.8～2.9㎝である。2・9は中層，その他は下層出土である。

杯蓋Ⅱ（12～14）　天井部中央に宝珠状つまみを有するものである。形状は，12はかえりが口縁端部より下方に突出し，つまみの基部の抉りは浅い。13はかえりが口縁端部より突出せず，つまみの基部の抉りは深く，器壁は薄手である。14は口縁部を欠失している。器壁は厚く，口径に比して器高が低く扁平な感じである。調整はいずれも天井部のかなり下方まで回転ヘラケズリ，内面は回転ナデ後仕上げナデ，その他は回転ナデを施し，杯蓋Ⅰに比べて丁寧である。12・13の焼成は良好で色調は灰色である。14の焼成はややあまく色調は明黄褐色である。法量は，12が口径13.5㎝・器高3.6㎝，13が口径13.4㎝・器高4.1㎝，14が復元口径約19㎝・器高2.7㎝である。いずれも中層出土である。

杯身（第8図15～34）は高台の有無によって杯身Ⅰ・Ⅱに分けられる。

杯身Ⅰ（15～32）　形状はいずれも底部が平坦かやや丸みをもち，体部との明確な境界をもち，体部から口縁部にかけて直線的に立ち上るもの（20・21）や，体部途中で明瞭な稜をなして屈曲して立ち上るもの（15～17・19・26）がある。，口縁端部は大半が丸くおわるが，19・22は尖り気味である。調整はいずれも底部外面が回転ヘラ切りの後ナデ，内面は回転ナデあるいはその後仕上げナデ，その他は回転ナデである。焼成は概ね良好で，色調は灰色であるが，18・27・31・32は焼成不良で，色調は乳白色である。なお，17は体部外面の屈曲部外面の屈曲部上方に沈線をもち，26は底部内外両面に「×」の字形のヘラ記号がある。法量は，大半が口径8.7～10.8㎝の範囲に入り，器高は2.8～3.9㎝である。これに対し，15は口径8.0㎝と小型であり，31・32は口径11.5㎝前後と大型である。このように法量から3つに細分することも可能であろう。小・中型品は杯蓋Ⅰに，大型品は杯蓋Ⅱに対応するものか。16・19・23・25・27・30・31が中層，その他が下層出土である。

杯身Ⅱ（33・34）　底部に高台をもつものである。33は底部は平坦なつくりで，体部途中で稜をなして屈曲しやや外反気味に立ち上る。口縁端部は尖り気味である。高台は「ハ」の字状に細長く開き，端部付近で外方に向けて尖り気味におわる。34は高台を欠失するが，杯部の形状・法量から33と同一形態と考えられる。調整はいずれも回転ナデ，焼成は良好で色調は灰色である。法量は33が口径12.4㎝・器高4.7㎝，34が口径12.8㎝である。

法量からみて杯蓋Ⅱに対応するものと考えられる。[1] いずれも中層出土である。

高杯（第9図35～42，48～50）は杯部の形状・法量から高杯Ⅰ～Ⅲに分けられる。

高杯Ⅰ（35・36）　杯部の形状は厚手の平坦な底部から明瞭を稜をなし体部が細長く外反気味に立ち上るものである。脚部は欠失しているが，49と同様な脚部をもつものであろう。調整は底部外面が回転ヘラケズリ，内面が回転ナデ後仕上げナデ，その他が回転ナデである。焼成は良好で，色調は灰色である。35には自然釉がかかっている。法量は35の口径10.1cm，36の口径9.7cmと小型である。いずれも中層出土である。

高杯Ⅱ（37・38）　高杯Ⅰの杯部の形状に似ているが，口径が大きい杯部をもつものである。脚部は「ハ」の字状に外方に開き，端部は外面に稜をつくって下方に屈曲し尖り気味におわる。調整は底部外面がヘラケズリ，内面は回転ナデ後仕上げナデ，その他は回転ナデである。焼成は良好で，色調は灰色である。法量は37の口径14.8cm・器高6.7cmである。いずれも中層出土である。

高杯Ⅲ（39～42）　丸みのある底部からゆるやかに内湾気味に立ち上る杯部をもつものである。脚部はラッパ状に大きく開き，端部は上下方向に拡張あるいは下方に屈曲する。調整は底部内面が回転ナデ後仕上げナデ，その他が回転ナデである。焼成は良好で，色調は39・41が灰色，40が乳白色，42が暗灰色である。39の杯部外面に沈線を一条もつ。法量は41の口径13.0cm・器高7.3cm，42の口径14.0cm・器高8.0cmである。なお，40が下層，その他が中層から出土している。

他に脚部片（48～50）がある。形状はいずれもラッパ状に大きく開き，端部は下方に屈曲して尖り気味におわる。48は高杯Ⅲと同形態の大型品と考えられる。49は脚柱部に沈線を2条もち，高杯Ⅰに付くと思われる。いずれも中層出土である。

盤（第9図43～47）はその形状から盤Ⅰ・Ⅱに分けられる。

盤Ⅰ（43～46）　平坦な底部からわずかに屈曲して短く立ち上り，口縁端部は丸くおわる。46はラッパ状に大きく開く脚をもつ。調整はいずれも底部外面が回転ヘラケズリ，内面が回転ナデあるいはその後仕上げナデ，その他が回転ナデである。焼成は43が不良の他は概ね良好で，色調は43が乳白色，その他が灰色～淡灰色である。法量は43の口径25.5cm，44の口径22.4cm，45の口径20.0cm，46の口径21.2cm・器高6.3～8.1cmである。なお，44・46が下層，45が中層，43が上層（第4層）出土である。

盤Ⅱ（47）　底部は上げ底気味で，体部途中で内湾して立ち上る。口縁端部は平坦である。脚部はラッパ状に大きく開き，端部は上方に若干肥厚する。調整は底部外面が回転ヘラケズリ，内面が回転ナデ後仕上ナデ，他は回転ナデである。焼成は良好で，色調は灰色

である。法量は口径20.8cm，器高7.5cmである。下層から46とともに床面に杯部を伏せた状態で出土した。

甕（第10図51・52）　いずれも頸部が「く」の字状に強く折れて短い口縁となり，口縁端部は外面に稜をつくり，断面が三角形状である。52の胴部は球形で最大径がほぼ中位にあり，底部は丸底である。51もほぼ同形態と考えられる。調整はどちらも口頸部がヨコナデ，胴部外面が平行条線状のタタキ内面が同心円状のタタキである。51の焼成はあまく，色調は乳白色である。52の焼成は良好で，色調は淡灰色である。どちらも中層出土であるが，下層でも甕の破片が出土している。

甑（第11図53）　口頸部のみで，形状は細い頸部からゆるやかに外反し，一旦内側に屈曲し更に口縁部まで大きく開く。調整は不明である。焼成はあまく，色調は乳白色である。法量は口径9.4cmである。中層出土である。

短頸壺（第11図54）　形状は，底部は丸みをもち，胴部はゆるやかに開き，最大径付近で急に強く内側に屈曲し，口頸部は短く直立して，口縁端部は尖り気味におわる。調整は器高の約⅓以下の底部から胴部にかけて粗いヘラケズリ，その他が回転ナデである。焼成は良好で，色調は淡灰色である。胴部上位にヘラ記号と思われる線刻がある。右側は一度刻まれた後，上からなでられて消えかかっており，改めてその左側に全く同形の線刻を施している。法量は口径7.6cm，最大径10.5cm，器高4.5cmである。下層出土である。

長頸壺（第11図55）　口頸部を欠失する。形状は最大径が胴部中位にあり，球形である。底部は径の大きい平底である。調整は底部がヘラケズリ，胴部外面がヨコナデ，内面下半が縦方向の指頭による粗いナデ，上半がヨコナデである。焼成は良好で，色調は底面が乳白色，その他が青灰色である。頸部周辺に円盤状の粘土板で胴部上部を一旦塞いだ状況を示す粘土の接合痕跡がみられ，いわゆる三段構成による製作技法[2]がうかがえる。法量は最大径16.0cm，底径12.4cm，現存高14.1cmである。下層出土である。

平瓶（第11図56）　口頸部及び胴部の一部を欠失している。形状は胴部中位に最大径があり，扁球形である。底部は径の大きい平底である。調整は胴部下位の２条の凹線以下が回転ヘラケズリ，底面が不定方向のヘラナデ，その他が回転ナデである。焼成は良好である。内面の器壁に気泡の膨張による瘤状の隆起が多くみられる。また，胴部上部を円盤状の粘土板で塞いだ状況が観察できる。法量は復元最大径約19cmである。中層出土である。

土師器は杯・椀・盤・高杯・甕・甑がある。

杯（第11図58）　形状は平坦な底部からゆるやかに内湾して立ち上り，口縁部直下で若干外反する。端部は尖り気味である。調整は内面に放射状と螺線状の暗文を交互に２回施

し，見込みがナデ，外面が横方向のヘラミガキ，底面がヘラケズリ後ナデである。器壁は薄く丁寧に仕上げている。焼成は堅緻で，色調は淡橙褐色であり，胎土は精良である。法量は口径17.4cm，器高5.3cmで，径高指数（器高1口径×100）は30ほどである。ＳＢ２南壁際の上層（第４層）で須恵器盤43と伴出した。

椀（第11図59）　底部を欠失している。体部は外面にわずかに稜をもち，ゆるやかに内湾して立ち上り，口縁端部は丸くおわる。調整は不明である。焼成はあまい。部分的に丹が残っている。胎土は砂粒を若干含む。法量は口径17.8cmである。下層出土である。

盤（第11図57）　底部は平坦で，体部は短く外傾し，口縁端部は丸くおわる。高台は「ハ」の字状に開き，端部は外方に向いて丸くおわる。調整は不明瞭だが，内面に放射状に暗文がみられる。焼成はあまい。椀（58）と同様内外面に丹を塗っている。胎土は砂粒を若干含む。法量は口径26.8cm，器高6.1cmである。下層出土である。

高杯（第11図60）　杯部上半と脚端部を欠失する。杯部底部は丸みをもち，ゆるやかに内湾して立ち上る。調整は不明である。焼成はあまく，色調は淡赤褐色である。胎土は精良である。下層出土である。

甕（第11・12図61～70）は法量によって甕Ⅰ～Ⅲに分けられる。

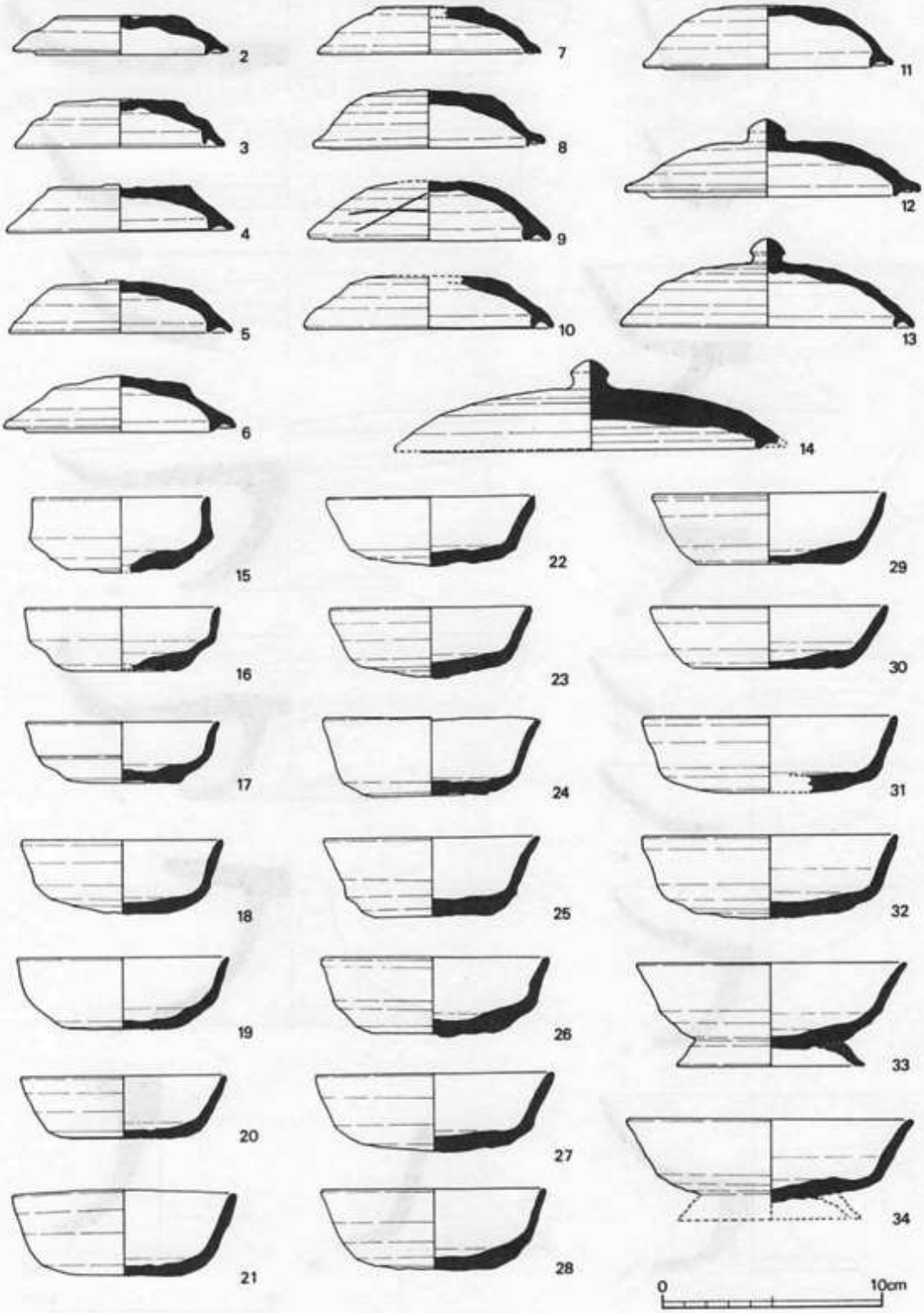
甕Ⅰ（61）　口径14cmと小型である。器高は推定約14cmである。口頸部は厚く，短く外反する。胴部はゆるやかに湾曲し，卵形である。底部は丸底である。調整は口頸部がヨコナデ，胴部外面が粗いハケ目，内面がヘラケズリで下部に指頭圧痕が残る。中層出土。

甕Ⅱ（62～67）　口径15.6～17.7cmの範囲に入る。頸部内面に稜をもち短く外反する口頸部をもつもの（62～64）と，頸部内面に稜をもたずゆるやかに外反する口頸部をもつもの（65～67）がある。調整はいずれも口頸部がヨコナデ，胴部内面がヘラケズリで，外面がハケ目のものとナデのものがある。62～65が下層，6667が中層，出土である。

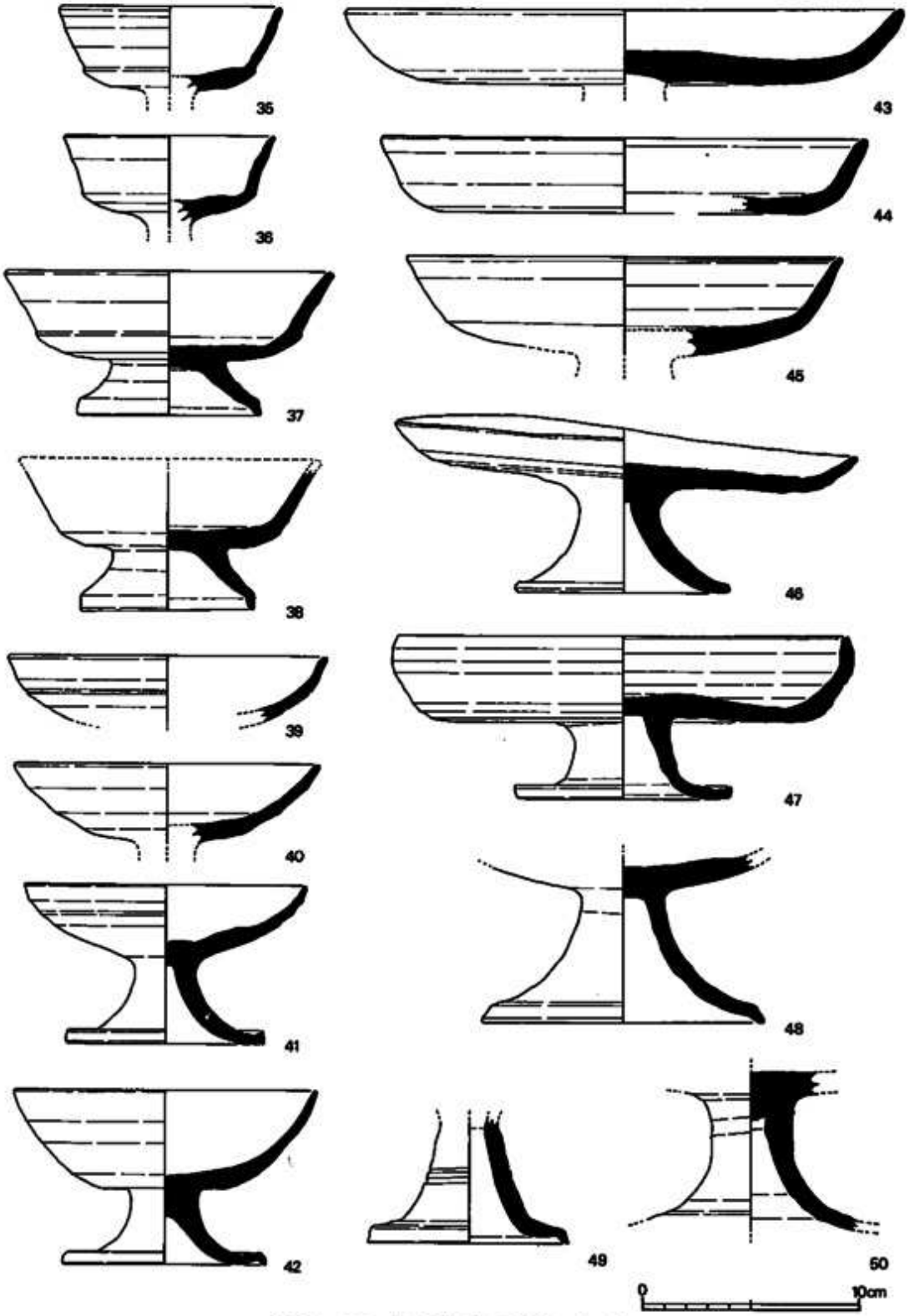
甕Ⅲ（68～70）　口径19.4～21.6cmを測る。頸部内面に稜をもち短く外反する口頸部をもつもの（68）と，頸部内側に稜をもたずゆるやかに外反する口頸部をもつもの（69・70）がある。調整はいずれも口頸部がヨコナデ，胴部内面がヘラケズリで，外面がハケ目のものとナデのものがある。69は下層，68・70は中層出土である。

他に甑の牛角状把手片などが出土している。

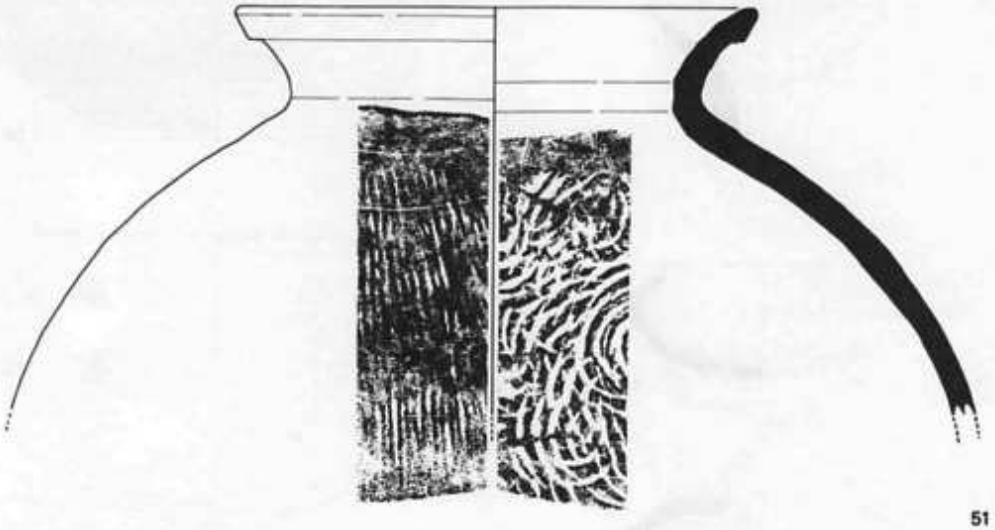
砥石（第12図71）　四面ともよく使用されている。特に主要面の二面はかなり使用され縦断面は撥形に内湾している。横断面は長方形である。途中から折損しており，現存長は5.4cm，最大幅4.9cm，最大厚3.0cmで現存の重量68.1gである。石材は硅長岩（フェルサイト）である。[3]

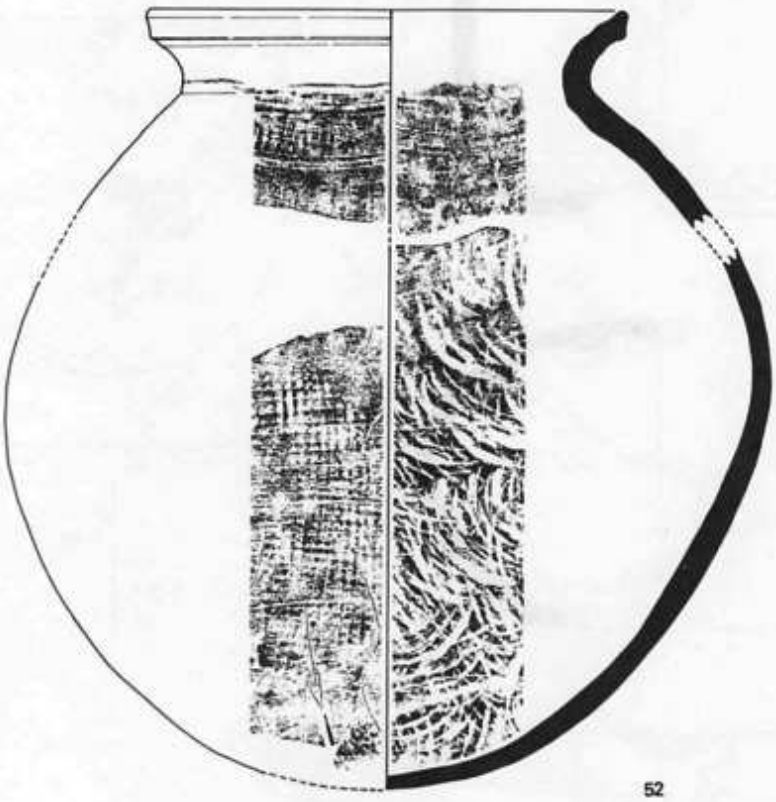


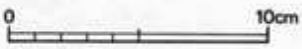
第8図　ＳＢ２出土遺物実測図（1）（1：3）



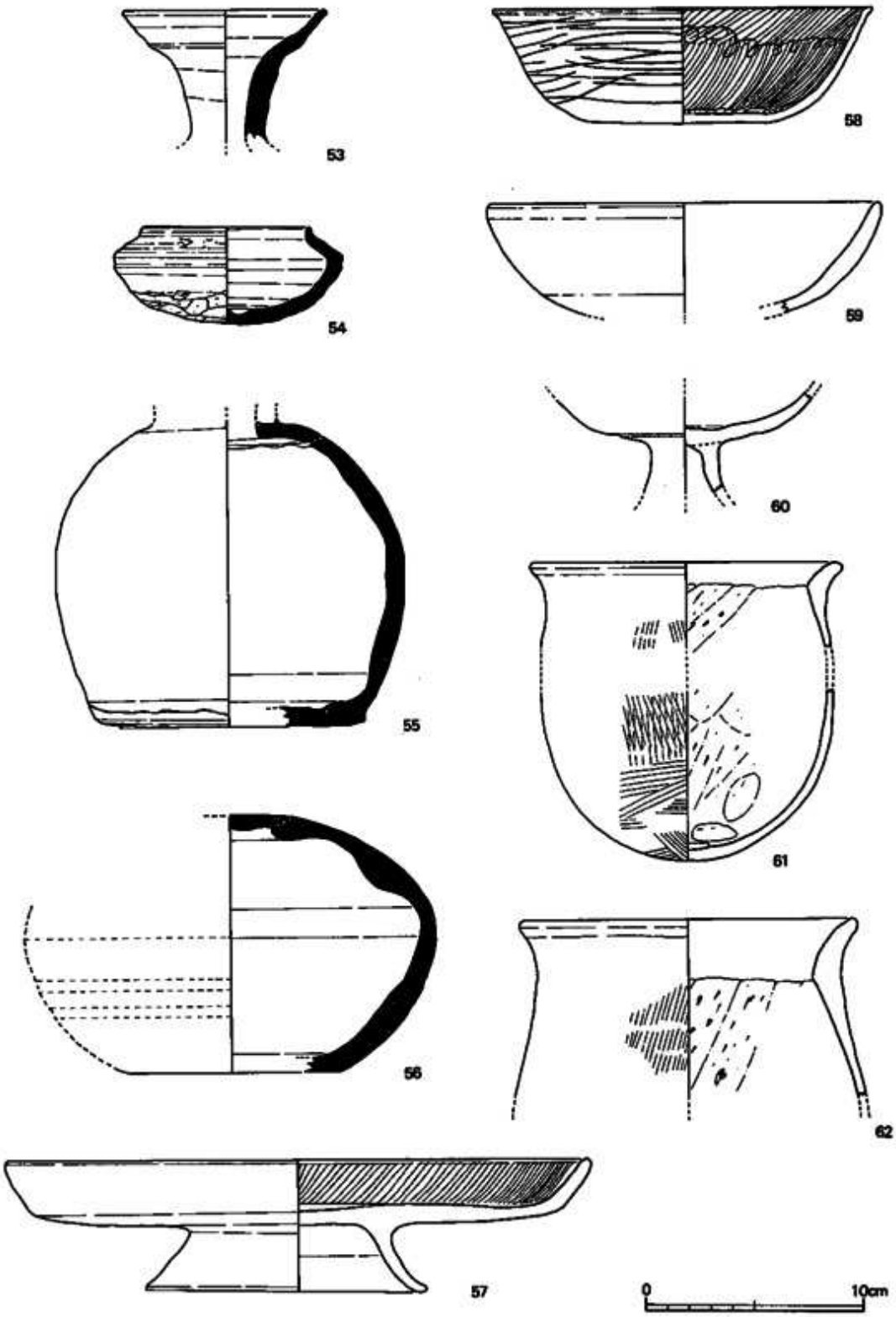
第9図　ＳＢ２出土遺物実測図（２）（1：3）



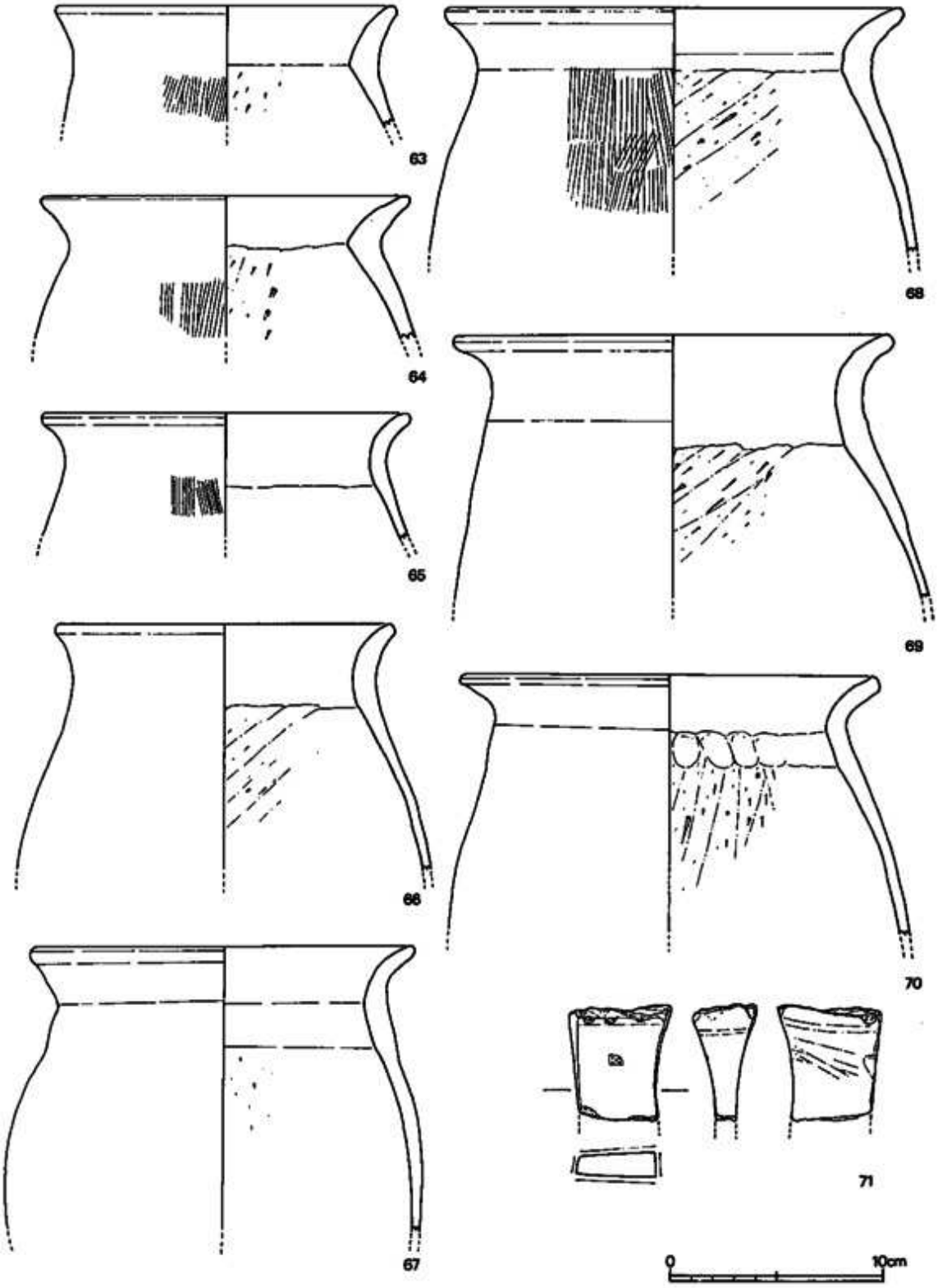




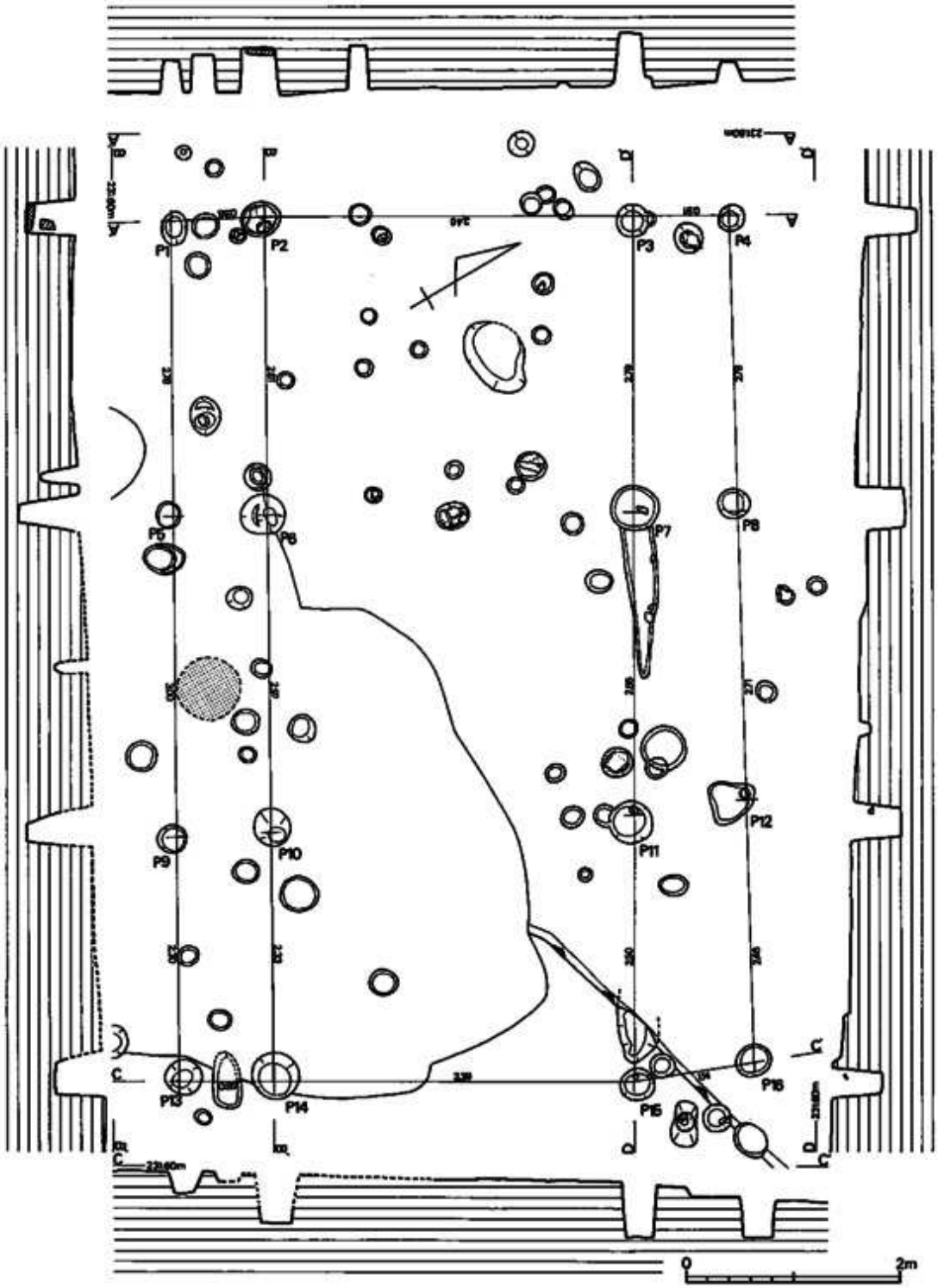
第10図　ＳＢ２出土遺物実測図（３）（1：3）



第11図　ＳＢ２出土遺物実測図（４）（1：3）



第12図　ＳＢ２出土遺物実測図（５）（1：3）



第13図　ＳＢ３実測図（1：60）
（アミ目：焼土）

(2) 掘立柱建物跡

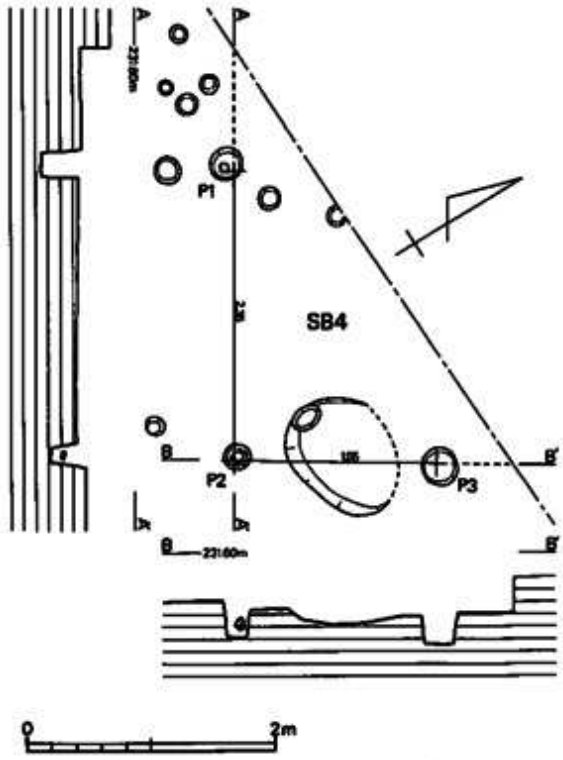
ＳＢ３（第13図，図版１ｃ）

調査区のほぼ中央で検出した身舎の桁行３間（8.1m）×梁行１間（3.4m）の掘立柱建物跡である。東西二面に幅の狭い廂を備える。棟方向はN60°Wで，ＳＢ４・５とほぼ平行する。身舎の桁行の柱間寸法は2.33～2.97mとばらつきがある。また廂の柱間寸法も身舎に対応している。柱穴の規模は身舎では直径0.35～0.45m，深さ0.45～0.60m，廂では直径0.20～0.35m，深さ0.20～0.40mである。柱穴のうちＰ２は底面に扁平な石を置いて根石としているほかに，掘方内に小礫を詰めたものが多い（Ｐ２・７・11・12・15）。

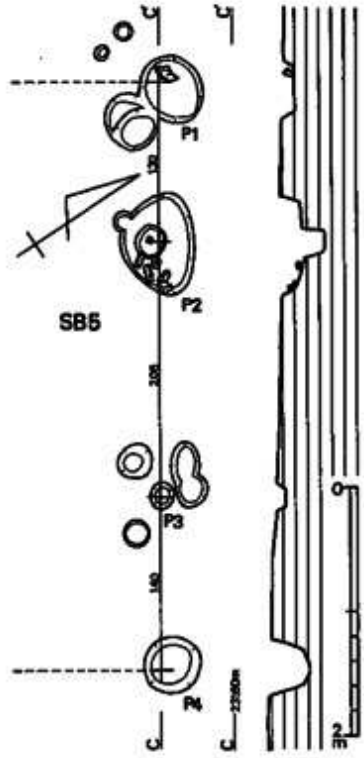
遺物は多くの柱穴から出土しているが，いずれも細片のため器種や時期は不明である。Ｐ７出土の土器片はその調整・胎土等がＳＢ４のＰ１出土の土師質土器（鍋）と酷似しており，同一器種と考えられる。建物の構造や遺物から中世後半頃のものであろう。

ＳＢ４（第14図）

調査区の中央北壁際で検出した建物跡である。柱穴は調査区内で３個しか検出されず，全体の規模は不明である。棟方向はN59°Wで，柱間寸法はＰ１～Ｐ２が2.35m，Ｐ２～Ｐ３は1.65mである。柱穴は直径0.20m～0.30m，深さ0.22～0.32mである。Ｐ２内に小



第14図　ＳＢ４実測図（1：60）



第15図　ＳＢ５実測図（1：60）

礫を詰める。遺物はＰ１より土師質土器（鍋）が出土しており，ＳＢ４は中世中頃以降のものであろう。

出土遺物（第18図72）

土師質土器（72）は鍋の口頸部片で，口径・器高は不明である。頸部が「く」の字に屈曲し，口縁部は短く外傾する。器壁は薄く，調整は内外面ともに粗いハケ目である。外面に煤が付着している。

ＳＢ５（第15図）

調査区西側で検出した柱穴列で，西側の黒フク土堆積部に拡がると考えられるが，確認しえなかった。棟方向はN57°Wである。柱間寸法はばらつきがある。柱穴は直径0.20～0.80*m*，深さ0.10～0.40*m*と不統一である。Ｐ１・２は掘方内に小礫を詰める。遺物はＰ３より亀山焼系陶器片が出土しており，ＳＢ５は中世頃と思われる。

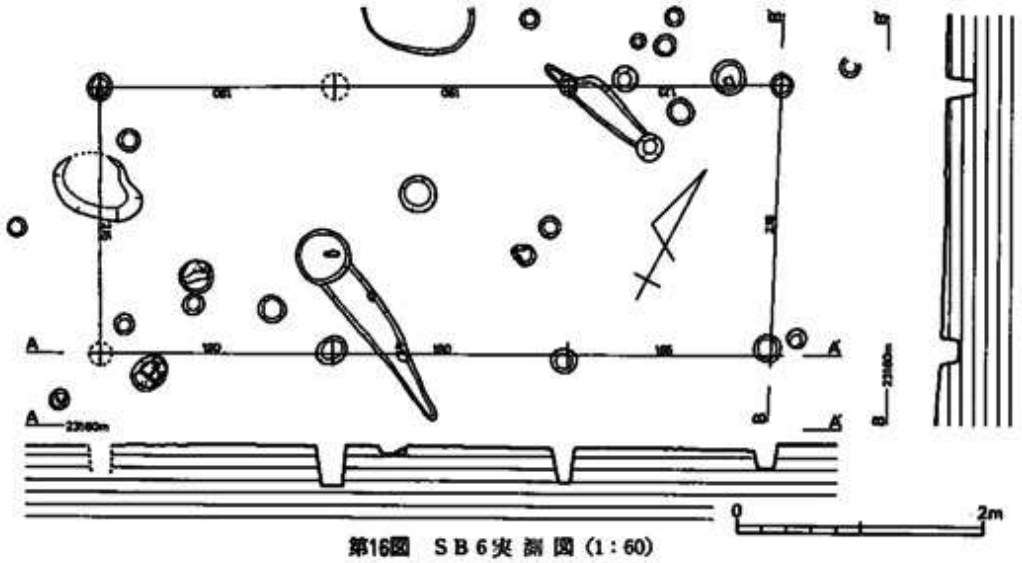
ＳＢ６（第16図）

ＳＢ３と重複して検出した桁行３間（5.5*m*）×梁行１間（2.2*m*）の掘立柱建物跡である。棟方向はN62°E，柱間寸法は桁行1.65～1.92*m*，柱穴の直径0.2*m*前後，深さ0.15～0.33*m*である。柱穴内に小礫はない。遺物が出土せず，ＳＢ６の時期は不明である。

(3) 土　　坑

ＳＫ１（第７図）

ＳＢ２の西側で検出した楕円形の土坑である。長径で2.67*m*，短径1.10*m*，深さ0.68*m*である。長軸方向はN14°Eである。底面は凹凸があり，壁は傾斜をもって立ち上る。南



第16図　ＳＢ６実測図（1：60）

端に２段の平坦面がある。埋土は主に黒フク土で自然堆積である。遺物は土器の細片があるが，器種や時期は不明である。なお，ＳＸ１との切合関係からＳＸ１より新しい。

ＳＫ２（第17図，図版２ｃ）

調査区東端で検出した楕円形の土坑である。東端部は調査区外に拡がる。推定長径約2.7m，短径1.75m，深さ0.58mである。長軸方向N85°Wである。底面は凹凸があり，西側に若干傾斜する。壁は傾斜をもって立ち上る。埋土は上層が黒フク土，下層が暗黄褐色土である。底面直上と上層で扁平な角礫群がある。遺物は土師質土器などが出土しており，中世以降のものと考えられる。また，北辺でピットを切っており，周辺のピット群より新しいと思われる。性格は不明だが，上層の礫群を墓標石とする土坑墓の可能性もある。

出土遺物（第18図73）

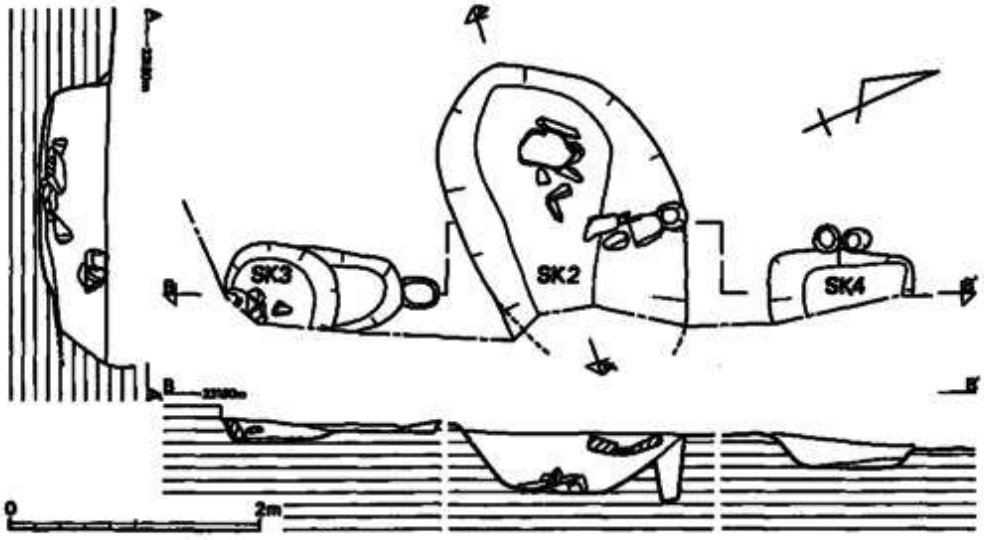
土師質土器（73）は底部が厚く，体部が短く立ち上る小皿である。底面は回転ヘラ切りである。体部外面に斜め方向の沈線をもつ。口径7.2cm・器高1.0cmである。

ＳＫ３（第17図）

ＳＫ２の南側の浅い土坑で，東半部が調査区外に拡がり全体の形状・主軸方向は不明である。最大幅0.90m，深さ0.20mである。埋土は黒褐色土で，角礫を多く含む。遺物は出土せず，時期・性格は不明である。

ＳＫ４（第17図）

ＳＫ２の北側の土坑で，東半部が調査区外にのび，全体の形状・主軸方向は不明である。最大幅1.17m，深さ0.28mである。遺物は出土せず，時期・性格は不明である。

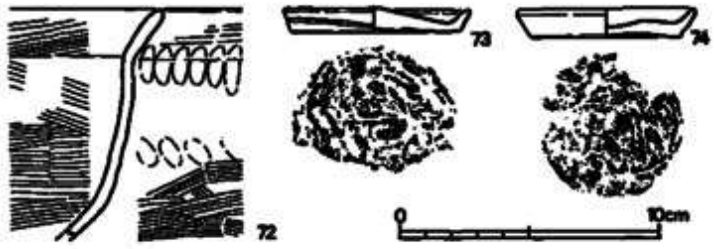


第17図　ＳＫ２～４実測図（1：60）

(4) その他の遺構と遺物

ＳＤ１・２（第４図）

調査区北半部で東西方向にのびる２条の溝状遺構を検出した。北側のもの（ＳＤ１）は幅0.9～1.5m，南側のもの（ＳＤ２）は幅1.4～2.0mで，深さはどちらも0.1m前後と非常に浅い。ＳＤ２の南壁は２段になっている。遺物はＳＤ２から土師質土器・陶磁器・鉄塊などが出土した。ピット群より新しいことや遺物からみて，集落が途絶えたあとに作られた遺構と考えられる。性格は不明である。



第18図　ＳＢ４・ＳＫ２・ＳＤ２出土遺物実測図（1：3）
（72―ＳＢ４，73―ＳＫ２，74―ＳＤ２）

出土遺物（第18図74）

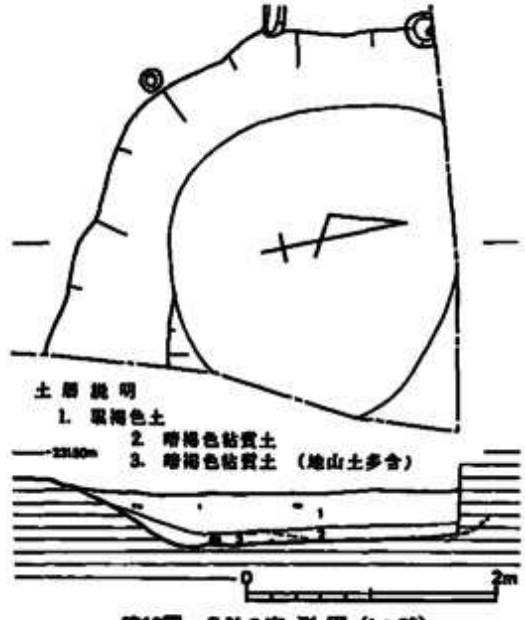
土師質土器（74）は平底から短く立ち上り，口縁端部は丸くおわる小皿である。底部は回転糸切りである。口径6.7cm・器高1.1cmである。

ＳＸ１（第７図）

ＳＢ２とＳＫ１に切られたテラス状の遺構である。全体の形状は不明である。底面は凹凸があり，壁は傾斜をもって立ち上る。底面のピットは後世のものである。深さは南壁際で約0.3mである。遺物は土器の細片が出土しているが，器種は不明で，ＳＸ１の時期・性格は特定できない。

ＳＸ２（第19図）

調査区東北隅で検出した円形状の落ち込みである。北側・東側が調査区外に拡がるため，全体の形状・規模は不明である。深さは0.56mである。底面は平坦で，壁は約30°の緩傾斜をもつ。埋土は上層が黒褐色土，下層が暗褐色土で，下層に角礫を含む。遺物は土器の細片，鉄塊が出土している。ＳＸ２の時期・性格は不明である。

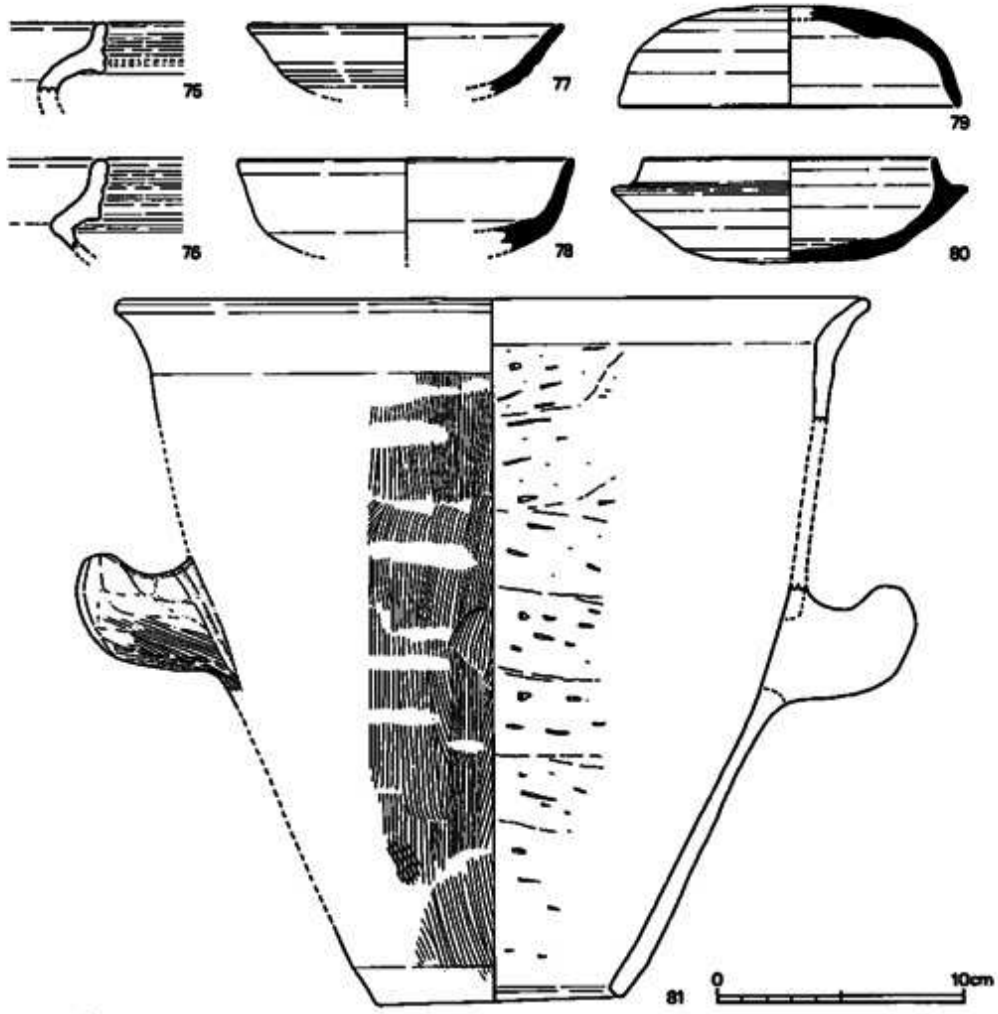


第19図　ＳＸ２実測図（1：60）

表土・包含層出土遺物（第20図）

表土から，弥生土器・須恵器・土師器・土師質土器・陶磁器などが出土している。

弥生土器（75・76）は甕形土器の口縁部片である。75は頸部が短く外反し，口縁部はほぼ直立する複合口縁で，端部は丸くおわる。端部外面に明瞭な凹線を3条施す。調整は内外面ともヨコナデ，焼成はややあまく，色調は橙褐色で，胎土は砂粒を含む。76は頸部が「く」の字状に屈曲し，口縁部は75よりも外方に長く立ち上る複合口縁で，端部は丸くおわる。外面は幅広の凹線を3条施す。調整は内面の頸部直下が横方向のヘラケズリ，その他がヨコナデである。焼成はややあまく，色調は明黄褐色，胎土は砂粒を多く含む。どちらも口径は不明である。白鳥遺跡出土の土器棺墓出土例[4]に類似しており，弥生時代後期中



第20図　表土・包含層出土遺物実測図（1：3）
（75～78―表土，79～81―包含層）

業[5]に比定でき，本遺跡B調査区ＳＢ５ｂ出土例よりやや新しい様相を示す。

須恵器（77・78）は高杯の杯部片で，77は体部がなだらかに立ち上り，78は厚い底部から直立気味に立ち上る。調整は回転ナデで，焼成はあまく，色調は乳白色である。

調査区西側の谷状の落ち込みに堆積する黒フク土の上層から，須恵器（杯蓋・杯身），土師器（甑・甕）などが出土した。

須恵器（79・80）のうち，79は丸みのある天井部から口縁部に垂下する杯蓋である。調整は天井部外面が回転ヘラケズリ，内面が回転ナデ後仕上げナデである。胎土は砂粒を若干含み，焼成は良好，色調は淡灰色である。法量は口径13.4㎝，器高4.0㎝である。80は杯身で，底部は丸みをもち，口縁部は内傾気味に立ち上り，端部は丸くおわる。受部は水平に短く突出する。調整は底部外面が回転ヘラケズリ，内面が回転ナデ後仕上げナデである。胎土は粗砂を若干含み，焼成は良好，色調は淡灰色である。法量は口径11.8㎝，器高4.2㎝である。

土師器（81）はほぼ完形の甑で，口頸部は内面に稜をなしてゆるやかに短く外反し，端部は丸くおわる。体部は頸部からゆるやかなカーブで下方に続き，底面端部は平坦である。胴部中位に牛角状把手を一対取り付けている。調整は口頸部がヨコナデ，胴部外面に縦方向のハケ目，内面が横方向のヘラケズリであり，部分的にナデ調整を行う。全体がひずんでおり，口径27.5～30.0㎝，底径9.6～9.8㎝，器高28.5㎝である。

註

(1) 東広島市教育委員会向田裕始氏の御教示による。
(2) 田中琢「須恵器製作技術の再検討」『考古学研究』11－2　昭和39（1964）年。
(3) 広島大学理学部地質鉱物学教室柴田喜太郎氏の御教示による。
(4) 広島県教育委員会「白鳥遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（２）　昭和54（1979）年。
(5) 桑原隆博「広島県におけるいわゆる山陰系土器について」『第18回埋蔵文化財研究会　弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について　発表記録』　昭和61（1986）年。

Ⅴ　ま　と　め

今回の名広遺跡A調査区の発掘調査によって，古墳時代前期の住居跡，終末期の住居跡状遺構，中世の掘立柱建物跡・土坑などを検出した。また，表土から弥生土器が出土し，谷状地形に堆積した黒フク土上層で古墳時代後期の包含層を確認した。本遺跡B調査区においても，弥生時代から中世にかけて断続的に営まれた集落跡が確認されており，[1] ここではB調査区の成果をふまえて，今回の調査結果を概観してまとめとしたい。

古墳時代前期の住居跡ＳＢ１について，その構造は４本柱の隅丸長方形と推定され，時期は布留式並行期と考えられる。B調査区でもこれに近い時期の住居跡２軒（ＳＢ２・６）を検出しており，当該期に遺跡全体に集落が拡がっていると思われる。なお，ＳＢ１中央ピットＰ４内の高杯の出土例については高宮町寸志名遺跡[2]などで仮器化した土器が住居跡内のピットから出土する例があることから，同様に住居の構築あるいは廃棄に伴う祭祀行為によるものである可能性が考えられる。[3]

古墳時代終末期の遺構として，土器を多量に出土した住居跡状遺構ＳＢ２がある。同時期の竪穴式住居跡は，三次市松ケ迫遺跡群B・F・G地点[4]で検出されているが，いずれも方形でかまどを付設するものが多い。これに対し，ＳＢ２はその形態からみて一般的な竪穴式住居跡とは考え難い。また，その埋土の堆積状況が二度にわたる人為的な埋土の様相を示し，その中・下層から多量の土器が出土している。特に床面直上で一括投棄と思われる土器溜りが検出されており，不自然な状況を示している。さらに，本遺跡B調査区でほぼ同時期と考えられる掘立柱建物跡群が検出されており，A調査区北西隣りの水田での試掘トレンチでも同時期の東西方向にのびると思われる幅約２ｍで断面がV字状の溝状遺構が確認されていることから，遺跡全体に同時期の遺構が拡がっていたと考えられる。その中でB調査区の建物群が中心をなしその南側を東西方向の溝で区画されている状況からみると，A調査区のＳＢ２は集落のはずれに所在していた可能性がある。以上のようなＳＢ２の形態・埋土堆積状況・遺物出土状況・集落内での位置などから，ＳＢ２が集落において特異な役割を果していたものと考えられる。

ＳＢ２出土土器についてみると，下層出土の須恵器は杯蓋Ⅰ（つまみがないもの），杯身Ⅰ（高台がないもの），高杯Ⅳ，盤Ⅰ・Ⅱ，短頸壺，長頸壺がある。この中で，杯蓋Ⅰ・杯身Ⅰはセットになると思われ，蓋杯の形態が全く逆転して法量の大型化の前兆がみられる。千代田町石塚第１号古墳出土例[5]などに類似しており，向田裕始氏編年[6]のⅢ形式の第１段階ないし第２段階にあたり，７世紀の中頃と考えられる。この時期頃から皿・盤など供

膳用の器種が多くなるなど，器種構成の変化が認められており，[7] 下層においてもその様子がうかがえる。土師器は椀・盤・高杯・甕・甑などがある。椀・盤・高杯など供膳用器は丹を塗ったり，暗文を施すなど丁寧に仕上げているのに対し，甕・甑などは粗いつくりである。中層出土の須恵器は杯蓋Ⅰ・杯身Ⅰに加え，杯蓋Ⅱ（つまみのつくもの）・杯身Ⅱ（高台のつくもの）が出土している。どちらも法量が大型化しており，セットをなすものであろう。高宮町明蓮窯跡出土例[8]に類似し，向田氏の編年[9]でⅢ形式の第2段階を中心とする時期に比定でき，7世紀中頃～後葉と考えられる。中層において杯蓋Ⅱ・杯身Ⅱの出現とともに高杯Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと多様な形態がみられるようになる。土師器は甕・甑などがある。甕は各々の個体差が大きく，形式的に大きな変化はみられない。以上から，中層出土土器は下層出土土器のうえに新相をもつ土器が加わっている様子がみられる。このことは下層と中層の埋められた時期に差があることを示すものと考えられる。上層出土土器は須恵器盤・土師器杯などがある。そのうち，土師器杯についてはその形態・調整・精良な胎土などから畿内からの搬入品である可能性が高く，[10] 杯Aのタイプに属すると考えられ，径高指数や調整などから飛鳥Ⅳ期に該当すると考えられる。[11]

出土土器の性格についてみると，主に一般的な食膳用器・煮沸用器であり，祭祀的な性格はうかがえない。このことから，ＳＢ２自体は祭祀的な性格をもってはいないものと考えられる。しかし，その中で注目されるのは搬入品と考えられる土師器杯の性格であろう。飛鳥・奈良時代の畿内産土師器については，畿内では藤原京・平城京など都城を中心に分布しているだけで，それ以外では顕著に分布しないといわれ，[12] また，地域は違うが東日本では古墳時代以来の拠点的な地域で，官衙を含む集落跡に主として分布していることから，地方への畿内産土師器の搬入が，律令国家の地域支配への強い意志を背景としていることが考えられている。[13] 本地域と畿内との関係については，本遺跡近くの下房後第２号古墳出土の須恵器鳥形瓶が安芸国東辺部に偏在し，朝鮮半島に出自をもつ畿内中枢勢力との関係が示されている。[14] こうした地方における畿内産土師器の性格や，本地域と畿内との関係などから，ＳＢ２出土の土師器杯の特殊な性格が考えられる。さらに本遺跡の７世紀中頃～後半の建物跡群を中心した集落と畿内との密接な関係がうかがえないだろうか。

中世の遺構については，掘立柱建物跡３棟・土坑１基を検出した。そのうち，ＳＢ３は３間×１間の身舎の二面に狭い廂をもつ建物跡で根石をもつ柱穴がある。この構造は中世後半頃から一般的にみられるようになる。[15] 柱穴出土土器は中世をくだらないものであり，中世後半頃の建物跡と考えられる。ＳＢ４・５はその棟方向・柱穴の規模・出土遺物からみてＳＢ３と併存していた可能性が高い。また，Ｂ調査区でも同時期の遺構・遺物が確認

されており，遺跡全体に広く集落が営まれていたと思われる。地元の人の話によると，旧往還，つまり，陰陽をむすぶ主要道路が本遺跡の付近を通っていたといわれ，また，本遺跡周辺が「七日市」といわれている。このこととあわせて生田川と房後川の合流点にあたる交通の要衝で物資の集散が容易である地形からみると，この付近に市が開かれていたことも十分に考えられ，本遺跡がそれらに関連した集落であった可能性もある。

以上，今回の調査によって本遺跡が弥生時代後期から中世後半にかけて断続的に営まれた集落跡であることが判明した。しかし，調査区が限定されたため，遺跡全体での，各時代の集落の規模・内容及びその展開は不明確のままである。また，生田川流域において特に集落跡の調査はほとんど行われておらず，本遺跡の占める位置などは判然とせず，今後の本遺跡及び周辺遺跡の調査研究に期したい。

註

(1) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『名広遺跡』—B調査区— 昭和62（1987）年。
(2) 広島県教育委員会「寸志名遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（2）昭和54(1979）年。
(3) 桑原隆博「弥生および古墳時代における柱穴内出土土器」『芸備古墳文化論考』 昭和60（1985）年。
(4) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『松ケ迫遺跡群発掘調査報告』—三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査— 昭和56（1981）年。
(5) 広島県教育委員会『石塚古墳発掘調査概報』 昭和49（1974）年。
(6) 向田裕始「芸備地方における須恵器生産（1）」—古墳時代を中心として—『芸備古墳文化論考』昭和60（1985)年。
(7) 田辺昭三『須恵器大成』 昭和56（1981）年。
(8) 広島県教育委員会「明遠窯跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（2） 昭和(1979）年。
(9) 註(6)文献と同じ。
(10) 藤田広幸「運ばれてきた土器」『ひろしまの遺跡』第25号 昭和61（1986）年。
(11) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ 昭和53（1978）年。
(12) 林部均「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』第72巻第1号 昭和61（1986）年。
(13) 註(12)文献と同じ。
(14) 河瀬正利「広島県出土の鳥形須恵器」『芸備古墳文化論考』 昭和60（1985年）。
(15) 奈良国立文化財研究所建造物研究室宮本長二郎氏の御教示による。

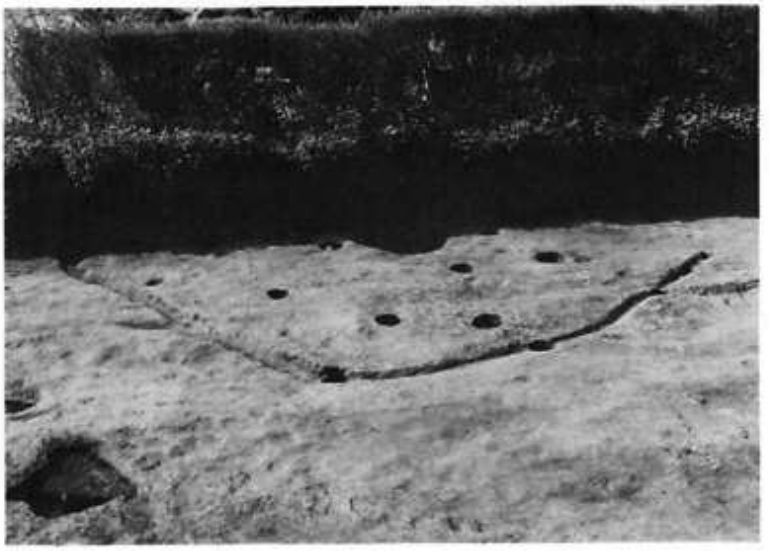
図　　版

a. 遺跡遠景
（東から）

b. 調査区全景
（西から）

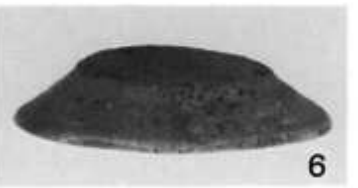
c. 調査区中央部
完掘状況
（東南から）

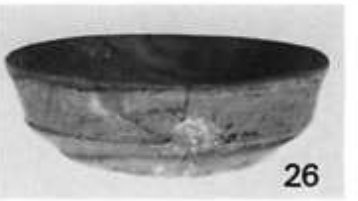
a. ＳＢ１完掘状況
（南から）

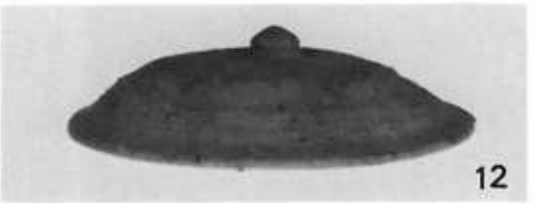


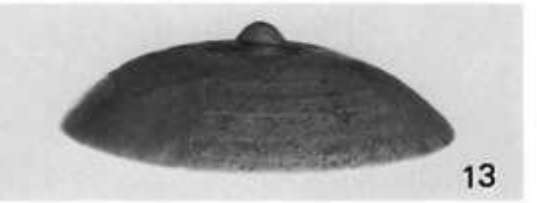
b. ＳＢ２遺物出土
状況
（東から）

c. ＳＫ２完掘状況
（西から）

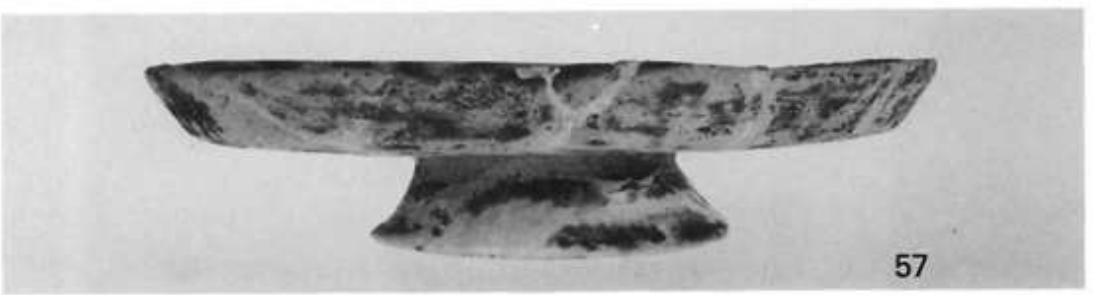


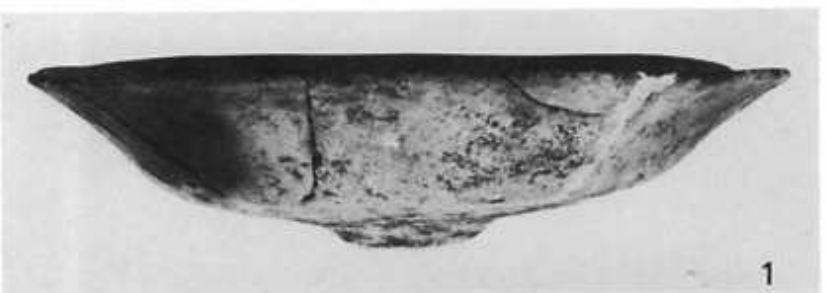


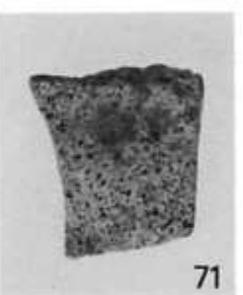




出 土 遺 物（1）







出 土 遺 物 （2）

出 土 遺 物（3）

名　広　遺　跡

―A 調 査 区―

―県営圃場整備事業（船佐地区）に伴う発掘調査―

1 9 8 7

昭和62年3月31日 発 行

編 集　広島県立埋蔵文化財センター

広島市西区観音新町4―8―49

電話（082）295―5451

発 行　広 島 県 教 育 委 員 会

印 刷　株式会社　柳盛社印刷所

広島市中区東白島町8―23

電話（082）221―2148